

ACCU Nara

International Correspondent

Vol.21 2018

The Twenty-first Regular Report

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所
Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

キルギス共和国



キルギス共和国のキョク・タッシュ墳墓

クンボルト・アクマトフ 専門職員

キルギス・トルコ国立マナス大学 考古学民族学研究博物館

クバットベック・タバルディエフ キルギス・トルコ国立マナス大学 教授

アルバスラン・アシャイク キルギス・トルコ国立マナス大学 准教授

カイラット・ベレク キルギス・トルコ国立マナス大学 助教授

ニュージーランド



ラーナック城のシダ園：20世紀初期のシダ園の修復

マシュー・シュミット オタゴ・南島担当上級考古学者

ヘリテージ・ニュージーランド

ソロモン諸島



アルナボン諸島シコポ島の考古遺跡の発掘

グリンタ・アレケ 考古学調査員

文化観光省 ソロモン諸島国立博物館

キルギス共和国

	キルギス共和国のキョク・タッシュ墳墓
	クンボルト・アクマトフ キルギス・トルコ国立マナス大学 考古学民族学研究博物館 専門職員
	クバットベック・タバルディエフ キルギス・トルコ国立マナス大学 教授 アルパスラン・アシャイク キルギス・トルコ国立マナス大学 准教授 カイラット・ベレク キルギス・トルコ国立マナス大学 助教授

2017年から2018年にかけて、クバットベック・タバルディエフ教授率いる、キルギス・トルコ国立マナス大学（ビシュケク）の考古学調査隊がキルギスタンのコチコル地区にあるのキョク・タッシュ遺跡で発掘調査を実施しました。この発掘調査は、トルコ協力共同機関（TIKA）の資金援助を受けて行われました。

後に墳墓と認定されたキョク・タッシュ遺跡は、クム・ドビヨ村から北東3kmに位置しており、ソビエト時代に建設された灌漑用水路の右岸にありました。遺跡の正確な地理座標は、北緯42°14'22.7"、東経075°34'36.0"です。墳墓は、地名にちなんで命名されましたが、そこでは青釉薬の陶器片が地元の人々によって発見されました。発掘調査によって、陶器破片は三角柱の短い脚がつく卓の一部であることが明らかになりました。

牧草貯蔵用の穴蔵の建設工事をしていた地元住民が、最初にキョク・タッシュ墳墓を1988年に偶然発見しました。地元の役人や一部の学者には発見が通知されましたが、資金が不足していたので発掘調査や保護活動は行われてきませんでした。



図1. キョク・タッシュ墳墓のある場所。発掘調査前の様子

2010年から2011年にかけて、遺跡の南東約3kmに位置するアク・ザル村の住民が、墳墓を不法に発掘しました。報道されたおかげで、盗掘は社会的な抗議を呼び起こしましたが、不法発掘の結果、大規模な土砂が煉瓦と混ざり合い、2つの穴が遺跡に残りました。さらに、ドーム状の壁の一部は、明らかに破壊されていました（図1）。

そのため、私たちは緊急発掘や保護活動を行うための必要な資金

を早急に探し求めました。2017年には、トルコ協力共同機関（TIKA）の支援を受けて、遺跡での発掘調査が開始され、2018年9月までに、発掘はほとんど完了しました。キョク・タシュ墳墓は、粘土を目地材とした焼成レンガで造られていました。主要な建築材料は、 $24.5 \times 24.5 \times 4.5\text{cm}$ 、 $25 \times 25 \times 4.5\text{cm}$ 、 $26.5 \times 26.5 \times 4.5\text{cm}$ 、および $27 \times 27 \times 4.5\text{cm}$ の四角形のレンガでした。さらに $13\text{-}14 \times 26\text{-}27 \times 4.5\text{cm}$ の大きさの長方形のレンガも、レンガ列を結合するために使用されていました。

表面に人間や動物の足跡があるレンガもいくつか見つかりました。成形レンガは焼成前に日干しにしますが、足跡はその際に付いたことはあきらかです。遺跡で発見された焼成レンガをはじめ、これらのレンガは、それらが墳墓の近くで製作されたことを示しています。

墳墓内部は2室からなり、小さな長方形の部屋と大きな正方形の部屋がありました（図2と図7）。壁は4方向に向かって立ち上がり、アーチ型の入口は、長方形の部屋の南壁中央に位置していました。墳墓の各部屋は、アーチ状の通路で接続されており、部分的に保存されていました。正方形の第2室は、明らかに球状のドームで覆われていたようで、底部のみが残っていました。ドーム部分は、四壁とスキンチ（入隅迫持）とよばれる四隅のアーチ構造で形作る八角形の枠組みの上に載っていました。スキンチは16のアーチで構成され、各アーチは内側へと徐々にコーナーに向かって下がって行きます（図3）。部屋の床には、焼成レンガが二層になって敷き詰めてありました（図4）。床と壁のレンガの大きさは同じでしたが、壁のレンガと比べて、床のレンガの表面と側面は滑らかに研磨されていました。



図2. 部分的に発掘された遺跡の様子。キョク・タッシュ墳墓の上部

墳墓は全長 9.5m、第 1 室の内部は 2.4×4m、第 2 室の外形は 6-6.3×6.3m でした。壁の厚さは 50～55cm、ドーム（底部）の直径は 5.2m でした。第 2 室の北半分に、東西方向に棺が安置されていました。棺は長方形の焼成レンガで作られており、目地材としてガンチ（石膏と粘土の混合物）を使用し、内部と外側は漆喰が塗られていました（図 5）。棺もあきらかに盗掘によって部分的に破壊されており、墳墓が建造された後すぐに被害にあったようです。おそらく女性と思われる骨格上部だけを、棺の中で発見しました。その人骨はもと埋葬された場所から移動されていました。女性の骨格下部および男性と思われる完全な骨格は、棺の外、第 2 室の西壁のところで見つかりました。

墳墓の発掘調査の結果、陶片やガラス片、動物の骨、青釉陶製卓の破片、銀貨、緑色石、鋳物製の皿などが発見されました。近い将来、発掘遺物や墳墓の構造に関する詳細な研究が行われ、より正確な年代もしくは仮説などが提示されるでしょう。調査の現段階では、墳墓が建造されたのは 11 世紀から 13 世紀の間とするのが妥当だと思います。この記念建造物は、キルギスタン国内で最初に発見された地下 2 室からなる墳墓なのです。それは、古代の、他に類を見ない建築的特徴を表現しているという点においても珍しく、中世のキルギスタンにおけるイスラム建築の始まりとその発展に新たな光を当てることになるでしょう。

2017 年に発掘調査が終了した後、キルギス共和国の法律「歴史文化遺産の保護と利用について」に基づき、予防的保護措置が取られました。遺跡を雨から守り、不法侵入を防ぐため、墳墓を覆うように側柵を備えた金属製の上屋が建てられました（図 6）。現在、キルギス共和国文化観光省では、遺跡保存と博物館建設計画などについて議論されています。



図 3：墳墓の 2 番目の部屋のスキッチ。



図4. キョク・タッシュ墳墓の第1室の床



図5 キョク・タッシュ墳墓の棺



図6. キョク・タッシュ墳墓の金属製上屋

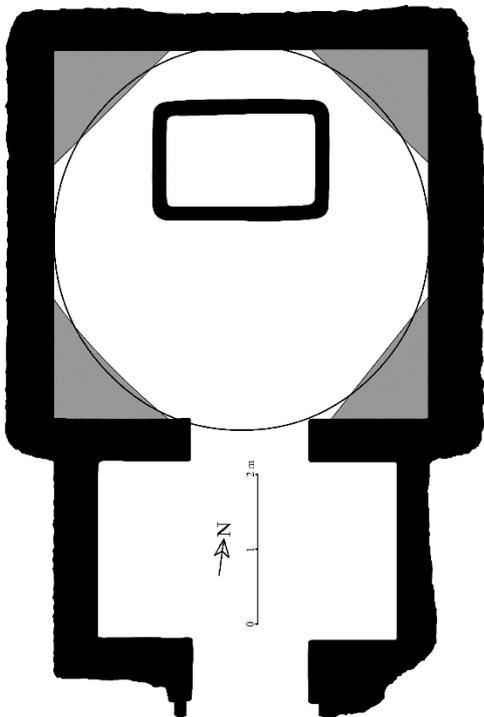


図7. キョク・タッシュ墳墓の平面図

ニュージーランド



ラーナック城のシダ園： 20世紀初期のシダ園の修復

マシュー・シュミット オタゴ・南島担当上級考古者
ヘリテージ・ニュージーランド

はじめに

ラーナック城は、元所有者のウィリアム・ラーナックにちなんでそう呼ばれていますが、オタゴ半島の高台に位置し、ニュージーランド唯一の本格的な城と言えます（図1・2）。ラーナック城は 1871 年から 1874 年にかけて建設されました。当時ラーナックと家族は高台にある城から、ダニーデンの港湾と半島が広がる壮大な景観を楽しんだ事でしょう。広大な敷地には、庭園が作られ多くの植栽が城を取り囲んでいました。1898 年にラーナックが死亡した後は、次々と所有者が変わり、城は荒れ果てましたが、1967 年にバーカー家が購入し、ラーナック城はかつての栄光を取り戻しました。本稿は、城内のほんの小さな話題についての報告です。かつての所有者によって 1927 年から 1928 年にかけて建造されたシダ園を、ノルコム・バーカー（城の管理者）が、考古学専攻の学生らのボランティアと協力してどのようにして修復したかについて報告します。

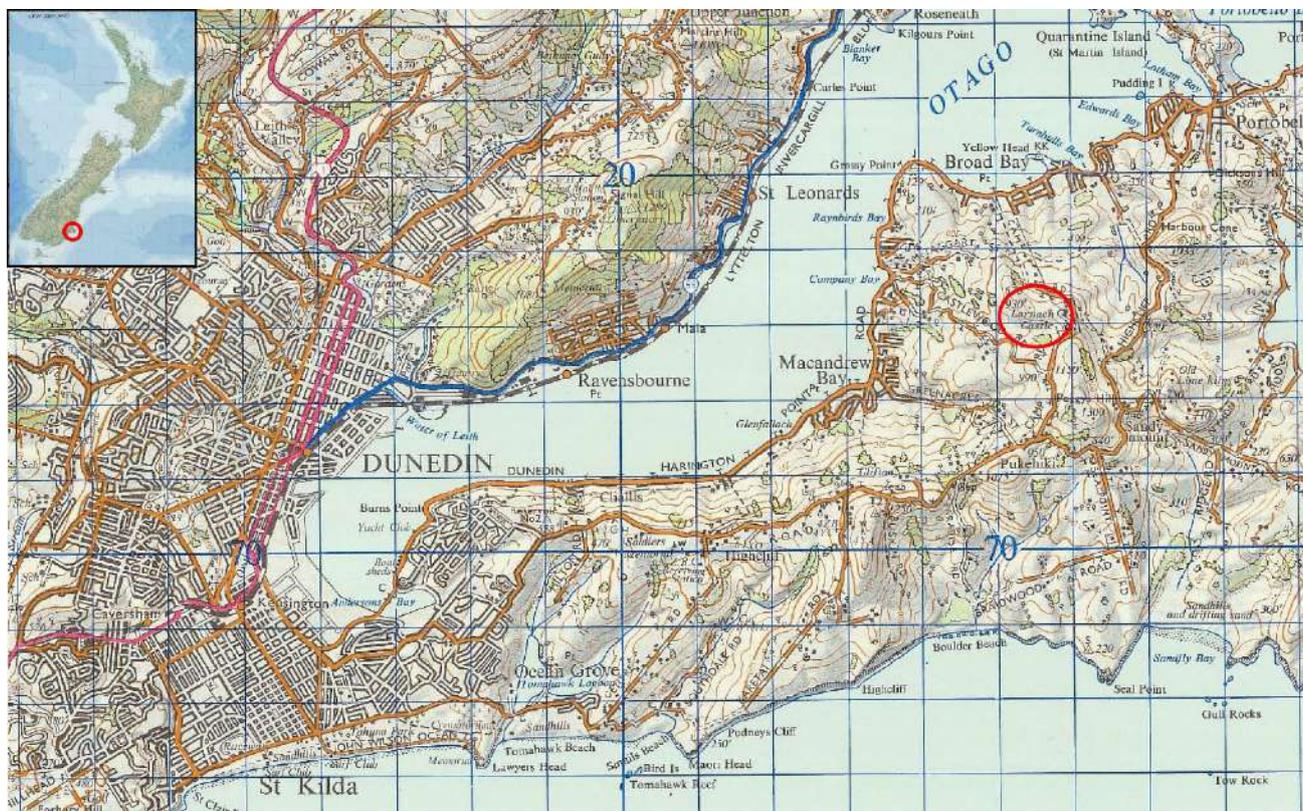


図1 ダニーデン市オタゴ半島にあるラーナック城の位置。

ウィリアム・ラーナックとラーナック城の略史（1874年～1898年）：大富豪から破滅へ



図2 バーカー家により修復されたラーナック城の現在（ダニーデン市の管理会社の許可済）

ウィリアム・ラーナック（1833 - 1898）は裕福な有力者で、銀行家として船舶業、農業、半島の土地をはじめ多くのオタゴ州の土地に投資していました。彼の影響力は経済界にとどまらず、大臣就任も含め25年間国会議員を務めました。彼は、膨大な費用をかけて郊外に34部屋もある巨大な石の城を建造し、城の内装のためにも惜しみなく資金を注ぎ込みました。各部屋の装飾には最良の材料を用い、高級家具や食器類、高価な調度品などをそろえました。庭園も贅を尽くしたものでした。庭園の入口はカウリ材でしつらえてあり、温室、ブドウ園、あずま屋、一段高くなったイタリア庭園、養魚池、願掛け泉などが作られました（ウィリアム 2013：29 参照）。馬を愛するラーナックは、1880年代までに所有する広大な土地（913 エーカー）に、58頭もの馬を所有していました（ウィリアム 2013：31）。城の管理経営に必要な建物としては、牛舎、鍛冶場、鶏小屋、豚小屋、ヤギ小屋、それに従業員宿舎と御者家屋、住み込みの洗濯屋などがありました（ウィリアム 2013：31）。1874年12月10日に、ラーナック一家は完成した城（ラーナックは「キャンプ」とよんだ）に華々しく引っ越してきました。子どもの達の遊び相手として輸入した猿やラマも一緒でした。

その後、一家は幸せから悲惨な生活へと転落し、家族は時には英国、ダニーデン市、ラーナック城と別々に暮らしました。ラーナックの事業は行き詰まり、1898年には悲劇が一家を襲います。ラーナックがウエリントン議会の議員事務所で自殺したのです。自殺の原因は、投機的投資の失敗であると言われていますが、成功を取めた彼のような男にとっても、二人の妻と娘の死が耐えがたかったというのが原因かもしれません。

ラーナック死後の城：廃墟から修復へ

ウィリアムは、『ラーナック城の修復計画』で、主亡き後のラーナック城と敷地の歴史を詳しく述べています（2013：37-49）。ここでは、要約にとどめます。1900年、ラーナック城とその関連資産は18区画に分割され、死後すぐに売りに出されました（図6・7）。そのうち17区画と城内の備品や調度品はすぐに買い手が見つきましたが、城本体と35エーカーの土地からなる区画18は売れ残りしました。1906年ようやく英国王が障害者収容施設とするために購入しました（図8）。1907年から1918年まで、40人の「お

となしい」精神障害者の生活の場となりました。1918年から1927年まで、英王室は管理人を城に常駐させました。管理人の報告によれば、城では破壊行為や窃盗が横行していましたが、その間も観光名所やキャバレーなど社交行事の場として利用されていたようです。

1927年に、パーディが城を購入し1940年まで所有しました。その間に、ラーナック城と庭園に新しい命が吹き込まれました。城の様々な建造物が修理されたのです。防水工事、電気の敷設、当世風台所の新設、1階ベランダの修理などが施工されました。庭園をビクトリア様式に復元するための、大規模な工事も行われました。工事の内容は、当時としては国内最大規模のロック・ガーデンの建設、大理石の噴水とドーム状ガラス屋根の建設などです。ガラス屋根は、1928年に沈没船パルーナ号が完全に沈没してしまう前に、船内の大広間から取ってきたものでした。ラーナック城は社交行事に公開され、パーディ夫人は骨董品のコレクションを展示販売していました。この頃に、シダ園は建設されました(以下参照)。パーディは城のオーナーとして、さらに修復を続けたいと考えていましたが、健康上の理由から売却を余儀なくされ、1940年にAFアームストロングが購入し、すぐにステッドマン夫人に売却しました。ステッドマン夫人は1959年まで所有し、その間観光客などに一般公開され、時には会議場としても使用されました。1941年から1945年頃まで、ラーナック城には80名のアメリカ通信員部隊が駐在していました。1959年、クラリッサ・エンプソンが城を購入し、時々一般に公開していました。

その後1967年にバーカー夫妻がラーナック城を購入し、以来バーカー家が所有しています。当時、城は荒れ果て、雨漏りがひどく城や敷地全体に植物が繁茂していました。パーディの施工した修復工事はそのほとんどが放置された状態でした。バーカー家が、城や庭園の修復に成功し過去の栄光を取り戻せたのは、かれらが城についての未来像(ヴィジョン)を持っていたからでした。そのヴィジョンとは、ラーナック城を観光名所とすることでした。観光客や来園者からの収入を、城と庭園の修復工事に注ぎこむのです。修復工事は熟練の職人が、最高の伝統技術を用いて施工するのです。したがって、何年も前からの来園者は訪れる度に、城や庭園が目に見えて変化していくのがわかるはずで、そして、ラーナック城はダニーデンの観光客にとって、ついでに立ち寄る所ではなく、主要な観光地となるのです。

ウィリアムズ(2013:45)によれば、1967年のラーナック城の年間訪問者数は約10,000人でしたが、バーカー家は1977年までに40,000人に増やしました(図10)。2017年には、135,000人が来園しました(ダニーデン市の人口はわずか127,000人)。当初はマーガレットとバリー・バーカー夫妻が中心となって修復工事を取り仕切りましたが、後には城内で誕生し育った2人の子供たちも加わりました。観光収入が増えるにつれて、より専門的な修復工事を担う専門家も雇われました。さらにマーガレットは何年もかけて、当時の家具、備品、調度品などを探し求め、修復に成功しました。現在、ラーナック城と庭園は、ニュージーランドの歴史のおよび文化的な重要名所への訪問を奨励する、政府の「ニュージーランド歴史的建造物リスト」に掲載されています。

シダ園：沿革と2018年の修復工事

シダ園については、パーディが1927年から1928年頃に建設したことだけしかわかっていません。ガラス屋根は、おそらく沈没船パルーナ号から取ってきたガラスを丸屋根として再利用したらしいのです。

元々のガラスの形状は樽形で、そのためシダ園の木枠組も長い曲線をしていました（2018年11月バーカー夫人談話）。シダ園はビクトリア時代の1830年代頃から大流行しており、1930年代までその流行は続きました。ビクトリア様式庭園にシダ園を造成するのはごく普通の事でした。

2017年に筆者はノルコム・バーカーとともに、シダ園を訪ねました。シダ園はラーナック城へと続く本道に隣接しています。シダ園を遺産建築として完全に復元するよりは、むしろ小道のたたずまいを残し、シダの植栽を復元し解説板を設置して隠れた森の廃墟として管理することで合意しました。来園者は、廃墟を「発見」し、探索して、肩肘張らずに歴史を学ぶことができます。

図13から16では、2018年4月に始まった広範囲な植生除去の第一段階修復作業の前のシダ園の状況を見ることができます。ご覧の通り、シダ園は何十年もの間に繁茂した植物に飲み込まれていました。ある場所では、倒木が壁を突き抜け、隅に岩が積み重なっている以外、内部の様子はわからなくなっていました。シダ園に床があったのかも不明でした。

2018年4月28日と29日に、植生除去の第一段階修復作業が予定されていましたが、豪雨のために作業は29日だけになりました。作業の最後には、シダ園の大きさや塀と入口の工法などが明らかになりました（図17～25）。大きさは、8×5mあり、帯状の良質コンクリートの基礎の上に約1mの高さの玄武岩の石壁がありました。石壁は玄武岩の荒石を、ドライスタック（乾式石積み）と一部セメントモルタルを使用して建造されていました。使用された石は装飾を施され、上品ですっきりしたまっすぐな石壁となっていました。シダ園の入口への続く階段には板石が使用されており、入口の両側には小さな庭エリアが見てとれます（図22）。現存する入口部分の柱はオアマル石で作られていますが、多分元は敷地内の取り壊された建物に使われていたものらしいです（2018年4月29日バーカー夫人談話）。

シダ園の内部は、まだ土と枯葉の堆積物に覆われていましたが、庭園の中央部と隅にあったらしい石壁は確認できました。外部から入口内部へと通じる給水管も確認できました（図23・24）。シダ園内部に試掘坑を掘ると、表土から30cm下に床がありました。床部分は黄色で、はじめはオーストラリアの砂岩敷石のように見えました（図25）。2018年4月29日の植生除去作業により、シダ園はパーディが長い時間と多額の費用をかけて、入念に計画設計をして造営したことが明らかになりました。

2018年8月26日、内部と外部の植生除去作業を続け、内部に堆積した土を掘り出すために、多数のボランティアがシダ園に集結しました（図26・29）。石壁から多くの小さな雑草と食い込んだ根を取り除き、内部の土壌を掘り出すと、シダ園のレイアウトがより詳しくわかりました（図30・33）。その作業により明らかになったのは、中央部に石組がありそこには元はシダが植えられていたこと、その中央には池があったことなどです。池の内面はセメントで被覆してあり今でも青と緑の塗料が残っていました。池には水が流れ込むようになっていました。石の水路を通り後ろの壁の注入口から水が供給されていました（図31）。4月に見つけた水道管が池へと続いているのも見つけました。この水道管が池の中央にある噴水の水源かもしれません。

シダ園の四隅には、一段高い石積み部分があり、おそらくシダの葉が垂れ下がるようにしてあったのでしょう。シダ園の奥壁と横壁に沿って一段高く石積みがされておりシダの生育場所を取り囲んでいました。左側の石壁は崩れていて、高くされた部分は不明瞭でした。シダ園の床部分は、損傷がなく、あざやかな砂岩の通路が内部へと続いていました。今のところ、床は泥だらけで、舗装材の確認はできません。発掘作業中に、遺物が少し発見されました。おもに、20世紀中期から後期の針金やビール瓶の破片でした。窓ガラスの破片も少数見つかりましたが、あまりに小さいのでシダ園のガラス屋根のものかどうかは確認できません。パーディが、ガラス屋根を銃で撃って破壊したと言われていています(2018年11月1日バーカー夫人談話)。シダ園入口の右側のオアマル石柱の上にあるとても小さなものが、シダ園の装飾性を示すヒントになります。それは、セメント製の一对の小さな長靴です(図36)。これは明らかに入口を装飾する小彫像の一部で、多分ノーム像か他のビクトリア時代の庭の置物などの像でした。

おわりに

シダ園修復の次の段階は、敷地内部の発掘調査と、外側の土台の回りに堆積した盛り土の除去です。その後、倒壊した石壁と修理の必要な内部の石垣を再建します。そして石垣とシダ園の床部分を清掃します。最後に、新しくシダを植え、解説板を設置する予定です。

謝辞

ラーナック城社の取締役であるノルコム・バーカーに感謝します。シダ園で共同責任者として雑草除去と発掘をしていただきました。この事業はボランティアの協力無しにはできませんでした。ラーナック城の職員、オスカム・シュミットとバーカーの子供達、デニス・アンダーソンとケイス・アンダーソン、シャー・ブライデン、オタゴ大学考古学協会、アトル・パークスとジャニイ・ショホルムなどです。マーガレット・バーカー夫人には、ラーナック城の歴史と、この象徴的な遺産を修復して観光名所にするという、ご夫妻のヴィジョンについてお話を伺うことができ感謝しています。

参考文献

Williams, Guy.2013. *Larnach Castle Conservation Plan, August 2013*. Prepared for Larnach Castle Limited. Larnach Castle website: <https://www.larnachcastle.co.nz/>



図3 ウィリアム・ラーナック氏の写真。サンフランシスコ市のブラッドリー&ルロフソンが1878年に撮影(出典:ウィキペディア・コモンズ)。



図4 ウィリアム・ラーナック氏の家族写真。サンフランシスコ市のブラッドリー&ルロフソンが1878年に撮影(出典:ウィキペディア・コモンズ)。

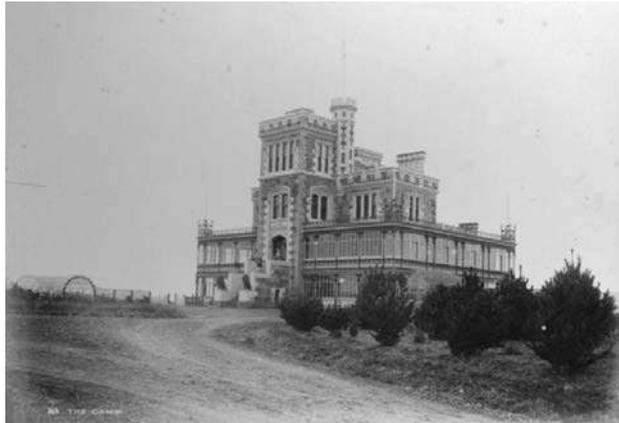


図5 「ザ・キャンプ」としても知られるラーナック城。多分フランク・コックスヘッドが1880年代に撮影（出典：MTG ホークスベイ博物館 ref: 48/75, 1213 アルバム 7, 80067. マコーミック氏寄贈）。

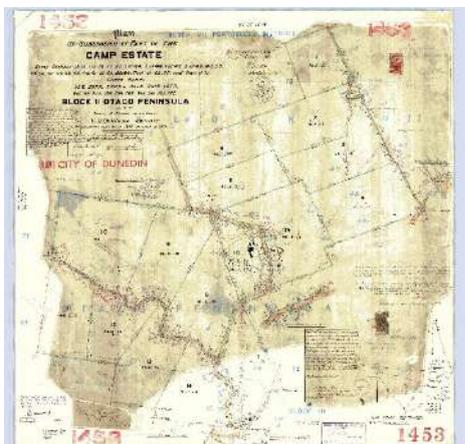


図6 1900年、販売のためにラーナックの地所を18区画に分割する計画。

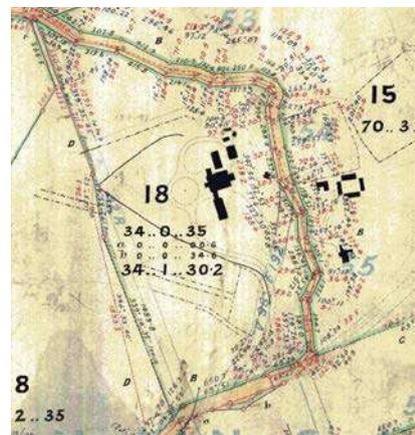


図7 1900年のラーナックの地所分割計画。区画18は城と35エーカーの土地を含む。



図8 収容所として使用されていた1906年のラーナック城（出典：ref. MA 1024736 テバパ国立博物館）



図9 1947年のラーナック城の空中写真。ホワイツ航空撮影（出典：WA-10670-F, アレキサンダー・ターンブル図書館、ウエリントン、ニュージーランド /records/22777584）。



図10 1972年のラーナック城（バーカー家提供）



図11 1926年のダニーデン植物園のシダ園（出典：アレキサンダー・ターンブル図書館、アルバート・パーシー・ゴッドバー APG-1935-12-G）。



図12 クライストチャーチにあった位置不詳のシダ園。1880年～1920年の間にステファノ・ウエップ写真スタジオが撮影（出典：アレキサンダー・ターンブル図書館 ref 1-1-009689-G）。



図13 植生除去前のシダ園入口（写真提供：筆者）。



図14 植生除去前のシダ園の外側の石壁から内部を見る（写真提供：筆者）



図 15 倒木によって被害をうけた壁 (写真提供：筆者)。



図 16 シダ園内部の隅石には植物が繁茂(写真提供：筆者)。



図 17 2018年4月29日の植生除去の際、シダ園内部からノルコム・バーカーが木をチェーンソーで伐採(写真提供：



図 18 2018年4月29日の植生除去後、図14の外壁が露出した(写真提供：筆者)。



図 19 2018年4月29日の最初の植生除去後、シダ園の様子がさらに明らかになった(写真提供：筆者)。



図 20 2018年4月29日に植生除去が終わると、シダ園の特徴と大きさが明らかになった(写真提供：筆者)。



図 21 細長いコンクリート基礎。その上に自然石の石壁が築かれていた。2018年4月29日（写真提供：筆者）。



図 22 石段のある入口と横の庭、2018年4月29日（写真提供：筆者）。



図 23 作業の第一段階終了後、シダ園内部の隅にシダの懸崖作りに使用された石が積み重ねてあるなど、内部の様子が明らかになった2018年4月29日（写真提供：筆者）。



図 24 外部の水源から給水管がシダ園へと通じていた（写真提供：筆者）。



図 25 シダ園内部の試掘坑で、おそらく砂岩の敷石らしいものを発見、2018年4月29日（写真提供：筆者）。



図 26 ボランティアの写真。2018年8月26日の第2段階発掘作業前（写真提供：筆者）。



図 27 シダ園発掘中のボランティア、2018年8月26日
(写真提供：筆者)。



図 28 シダ園発掘中のボランティア、考古学者シャー・ブライデン (左)、エリカ・オスカムシュミット (右)、2018年8月26日 (写真提供：筆者)。



図 29 シダ園発掘中のボランティア、左は遺産ガイドのアソル・パークス (シティ・ウォーク所属)、右はラーナック城の管理者ノルコム・バーカー、2018年8月26日 (写真提供：筆者)。



図 30 2018年8月26日の発掘調査後のシダ園。内部のレイアウトが見てとれる。後方には入口、中央に池、通路は内部の周回路となっている 2018年8月26日 (写真提供：筆者)。



図 31 シダ園の後壁からみた様子。水は後壁から石の側溝をとおり中央の池へと流れ込む。水源がどこかはいまだ不明、2018年8月26日 (写真提供：筆者)。



図 32 発掘された通路とシダ園左側にあり入口に向けた一段高い栽培区画。通路は淡黄色の砂岩でできた床が下にあるのでぬかるんでいる。内部の左隅と右隅には、シダの懸崖作りに用いられたであろう石が大量にあった（写真提供：筆者）。



図 33 入口からみたシダ園。レイアウトと崩れた後壁と左壁が見える。給水管が外部からシダ園へと入り池まで続いているのがわかる、2018年8月26日（写真提供：筆者）。



図 34 図 33 にある給水管、2018年8月26日（写真提供：筆者）。



図 35 2018年8月26日に清掃済みの入口敷石と横庭（写真提供：筆者）。



図 36 コンクリート製の小さな長靴。オアマル石の門柱の上にあった行方不明の小像のもの（写真提供：筆者）。

ソロモン諸島

	アルナボン諸島シコポ島の考古遺跡の発掘
	グリンタ・アレケ 考古学調査員 文化観光省 ソロモン諸島国立博物館

はじめに

シコポ島は、図1に示す通り、大きな2島の間を横たわるマニング海峡に位置しています。2島はそれぞれソロモン諸島チョイセウル州およびイサベル州に属しています。シコポ島は、1993年に制定されたアルナボン海洋保護区(ACMCA)内にあり、島には重要な考古遺跡が残されています。リチャード・ウォルターとオズワルド・アレササが2014年に調査を行い、同年8月に3種類の遺跡を確認しました。それらは、(1)儀式のための神殿もしくは宗教遺跡(2)遺物散布地域：貝殻、土器、加工済みシャコ貝など(3)岩窟住居：人間が住んでいた痕跡の残る洞窟などです。遺跡調査などの考古学研究は、ニュージーランドオタゴ大学とソロモン諸島国立博物館が協力して、2016年まで継続して進められました。2017年には、研究チームがこの地域では初めてとなる考古発掘調査を実施しました。

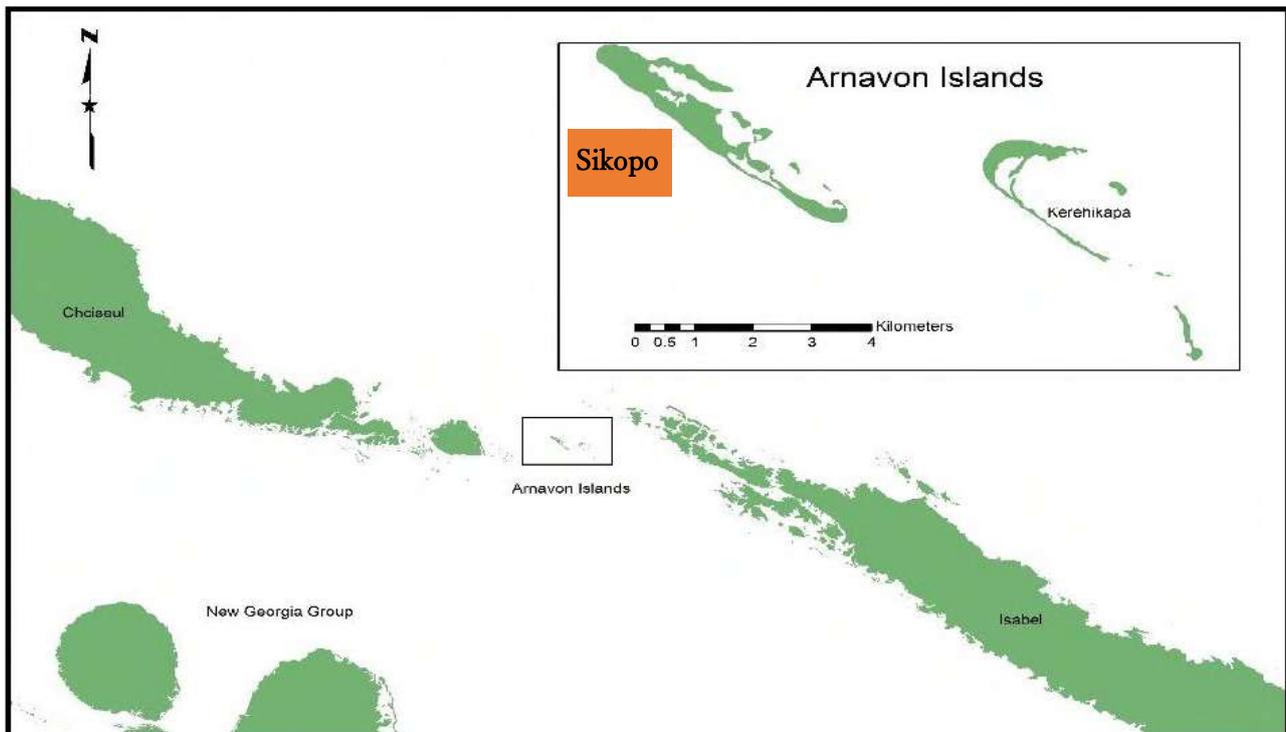


図1 アルナボン諸島とシコポ島の位置(出典：リチャード・ウォルター2014年)

図3は、第1層および第2スピッツ(鋤の刃だけの深さの単位)を示しています。黒くもろい土で、多数のニシキウズ巻貝が1カ所に堆積していました。第1層および第2スピッツ(地表面から20cm下)で見つかった巻貝の堆積はすべて数量を確認し、記録に残しました。その結果、巻貝が約275点、その他の種

類のシャコ貝も確認できました。貝類が1カ所に集中した堆積は、珊瑚の露頭からかなり離れた場所でも見つかりました。この場所の上層部の地層では、大きな木の根が侵入していました。巻貝には、焼けたものもありました。それは、火による調理の証拠となります。

図4は、第1層および第3スピッツ(地表面から30cm下)を示しています。ここでは、42点の巻貝が発見されました。種類の異なるものでは、巨大二枚貝も約15点ありました。巻貝には、焼けたものや一部損傷しているものもありました。

図5は、90cmほど掘り進めた地層を示しています。壁面の断層地層です。第2層は、淡褐色地層で、第3層は白砂状地層で天然土層です。この地層内には遺物は含まれていません。図内の2つの土の山は、灰と木炭の混合物で、非常に密なかたまりです。

図4は、遺跡の東断面です。木の根が混入した遺物もありました。図2から6に示される発掘によって、この遺跡はかつて昔に、珊瑚の露頭に近い調理場として使用されていたことがわかります。焼けた巻貝と木炭がここから発見された事からも明らかです。

マニング海峡にあるアルナボン諸島に含まれるシコポ島において、発掘により出土した遺物は、おもに貝殻類、腕輪の破片、土器などです。原料となる珊瑚、貝殻およびセラミックスなども見つかりました。発掘の深さは、上層から下層まで約90cmでした。さらに、動物の骨や石やセラミックスなども発掘しました。その他の遺物としては、鳥骨や魚骨、貝殻、珊瑚、土器、木炭などがありました。これらのすべての遺物は、当時の人々の食生活と生活様式を示すものです。発掘地域の調査により、人々は多くの巻貝を主食としていたことがわかりました。それは、当時の人々が営んでいた活動と行動を示しています。

結論

シコポ島の考古調査により、多数の巻貝やその他の貝類が発掘されました。それは、過去にここに暮らしていた人々が何を食べ、どのように暮らしていたのかを教えてください。発掘調査をした遺跡は、岩窟住居の近くにあり、調理場として使用されていた可能性があります。木炭が土壌に混じっている形跡があったからです。この考古遺跡は、保存され守られています。この地域には人は住んでいません。しかし、この場所を訪ねる人は、地表面に散在する遺物を踏み荒らさないように十分注意しなければなりません。

参考文献：

Radclyffe, C. *Eastern Section-Sikopo*, 2018

Walter, R. *Archaeological Vulnerability Assessment-Sikopo Island, Arnavon Island Group, Solomon Islands*, 8th December 2014.



図2 発掘現場の準備と清掃作業



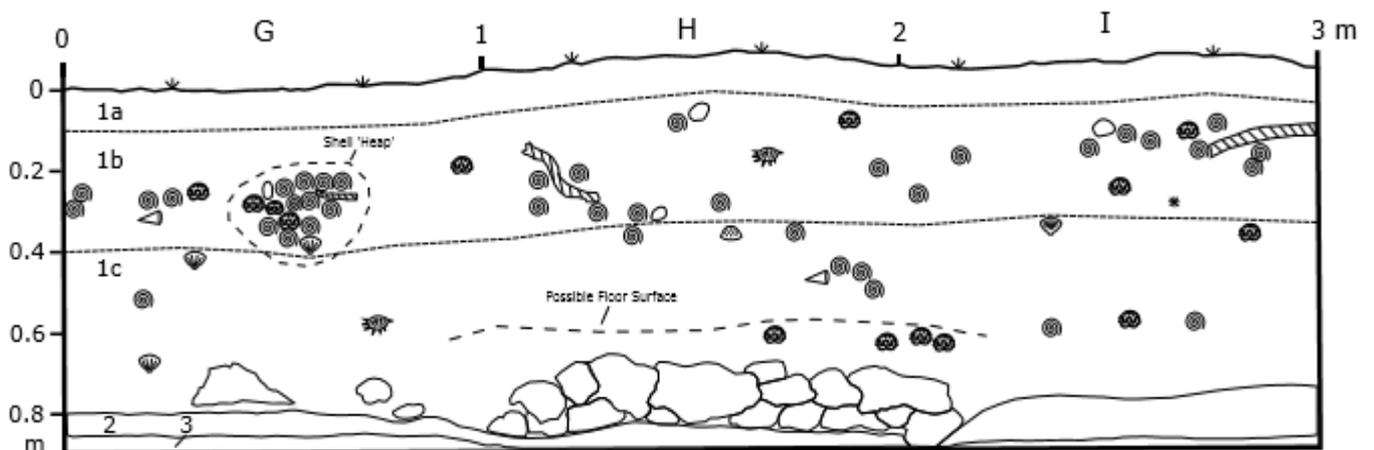
図3 第1層、第2スピッツ (20cm)



図4 第1層、第3スピッツ (30cm)



図5 第1層、第5スピッツ (50cm) ; 第2層、第6スピッツ (80cm) ;
第3層、第6スピッツ (90cm)



KEY

○	Coral	◊	Pearl
☞	Tree root	◊	<i>P. clathrata</i>
⊗	Trochus	☞	Lambis
⊗	Tridacna	*	Pottery
◁	Conus	★	Obsidian
⊗	Cowrie		

- 1 a. 黒褐色の表土、
- b. 黒褐色の土壌が続いているが、珊瑚や貝の破片が多いため礫岩状となっている。廃棄された貝殻の堆積と思われる焼けた巻貝や二枚貝の貝殻が密集した塊を含む。
- c. 濃く炭のように黒い土壌がサンゴや貝殻の破片と混ざっている。上層土壌よりも木炭が豊富。床面と思われる層を含む。同じ深さに、焼けた巻貝と木炭の塊がいくつかあり、中には炭をすくうシャベルと思われるものもあった。
2. 淡褐色のもろく砕けやすい砕けやすい薄層。サンゴと貝殻の破片が大部分をしめる。
3. 白く細かい海砂の基礎層。漂白されたように白く大部分が無傷の貝殻、魚、亀や蟹の遺物を含む。

図6 東断面図 (出典: Charles Radclyffe, 2017)